HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	農村と都市の創造的関係の構築に対する観光の機能に関する研究 ： ワインツーリズムを事例として［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	八反田, 元子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第12289号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61548
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Motoko_Hattanda_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）　　氏名：八　反　田　元　子

審査委員

主査　教授	西　川　克　之
副査　教授	真　板　昭　夫
副査　教授	敷　田　麻　実
副査　教授	山　村　高　淑

学位論文題名

農村と都市の創造的関係の構築に対する観光の機能に関する研究
～ワインツーリズムを事例として～

本論文の審査の一環としてまず、北海道大学メディア・コミュニケーション研究院 608 室において、平成 27 年 12 月 22 日 10 時 30 分からおよそ 2 時間の時間を費やして公開口頭試問を実施した。その冒頭で論文執筆者が 45 分間で論文の趣旨について説明した後、主査、副査がそれぞれ、論文の内容、研究手法、論述の進め方などについて質問を行い、それに執筆者が回答する形式で試問が進められた。公開口頭諮問終了後、学位論文としての合否判定を含めた論文審査を 4 人の主査・副査のみで行った。

公開口頭試問の場では主に以下のようなコメントや質問が審査委員から提示された。(1)ワインツーリズムを、都市と農村との創造的関係性から読み解こうとする視点は社会的背景を踏まえた時宜を得たものであり、独自性を有する。(2)徹底した事例調査による豊富な資料の提示については、ヒアリング等を通して本研究が初めて公表する情報も多く含まれ、高い新規性を有している。(3)本論文では、農業生産活動が文化性を有するという前提に立っているが、ここで言う「文化」とは具体的にはどのような意味で用いられているのか。(4)研究目的に「観光による人的交流を通して、受入側（農村・生産者）と訪問者（都市・消費者）の意識や行動が変化することを明らかにすること」とあるが、その目的は明確に果たされたと言えるのか。(5)農業者と消費者の関係の再構築をテーマとしているが、ワインは数ある農産品の中で特異なものであり、それを事例として取り上げて一般的な結論を導き出すのは無理があるのではないか。(6)ワインに特化するよりもむしろ、ワインと食を結びつけているヨーロッパのモデルを手本として、「新しい食文化」という戦略や、それを実質化する「認証制度」が必要ではないか。(7)農村地域における文化の創造が波

及して都市の文化が変容するといった状況を見通すことは極めて困難と思われるが、事例として扱われた農村地域においては都市との間にどのような実質的交流が起こったと言えるのか。(8)なぜ調査対象として日本の生産地を取り上げたのか、その意義はどこにあるのか (9)農村における生産活動に着目した意図はどこにあるのか。(10)論文の中で、「観光」や「創造的関係」の定義付けが試みられているが、それは主にどのような研究者のどのような論考にもとづいてなされているのか。(11)「消費」を本来的な「享受」の要素を失った集団的な機能として捉えるボードリヤールを援用して、生産者も「モノ」のレベルを超えた意味を理解・共有するとされているが、そうしたことが果たしてなぜ生産者にも求められなければならないのか。これらの質問に対して、執筆者はおおむね的確にかつ誠実に応答し、そうしたやり取りの中で、本論文において導き出された結論が学術的あるいは社会的にどのような価値があるのかを執筆者が客観的に把握し、また展開されている議論の可能性と限界についても執筆者自信がしっかりと認識していることが確認された。

引き続いて行われた委員による論文審査においては、以下のような指摘がなされた。(1)農産品を介した都市と農村の関係の再構築に焦点を当てた議論には今後の発展可能性が大いに認められる。(2)一方で、農村文化を軸とした交流という論点には、いくぶん理念的すぎるきらいがあり、たとえば、農業技術がいかなる変化を生活にもたらし、またそれがいかにして文化に昇華していくのかといった点についての分析が不足している。(3)またより一般的に言えば、技術と文化の不可分性といった考察まで視野に入れるような文化論に関わる議論が足りていない。(4)論文構成の点で言えば、研究の背景の説明が緒言と方法論の説明の後の第 3 章に置かれているため、論旨の展開に違和感を感じさせるところがある。(5) 70 ページ近くを占める第 5 章において、調査結果を延々と羅列している印象を拭いきれず、また他の章における論述や分析との有機的な照応が見えにくくなっている。(6)都市と農村の関係をテーマとするのであれば、アンケート調査の自由記述部分の分析をより丹念に行うべきではなかったか。

審査の場では、こうして論証や論文構成の不足を指摘する意見がいくつか表明されたものの、質と量の両面において充実したフィールドワークとアンケート調査を着実に実施したうえで得られたデータは、それだけでも実体的な価値のあるものと評価され、また何よりも、日本においてはじめてなされた本格的ワインツーリズム研究であると認められる本論文の学術的・社会的意義の独自性の高さは、博士論文としての水準を満たして余りあるものであると判断された。

上記のような審査の過程を経た結果、審査委員会は全員一致して、八反田元子氏から提出された博士学位論文は十分に合格に値するものであるとの結論を得た。